

日本精神保健社会学会

THE JAPAN ASSOCIATION OF
MENTAL HEALTH SOCIOLOGY

<日本学術会議協力学術研究団体 No.1001>

ニュースレター第 62 号

発行人：宗像恒次 編集人：山本美奈子

平成 29 年 12 月 15 日

事務局：栃木県宇都宮市豊郷台 1-1

帝京大学宇都宮キャンパス

滝澤武研究室内

TEL&FAX 028-627-7188

E-mail: info@jamhs.org

第 23 回日本精神保健社会学会学術大会を終えて

実行委員長 谷口清弥（四條畷学園大学看護学部）

11 月 23 日、落ち葉の舞い散る筑波大学東京キャンパスにおいて第 23 回日本精神保健社会学会学術大会が開催されました。‘レジリエンス’について語り合おうとの宗像学会長の呼びかけに大勢の方がご参加下さいました。午前是一般演題として 12 題の口答発表が行われました。昨年までのポスターからパワーポイントを用いた口答発表に変更したことで、それぞれの内容がよく伝わる発表となりました。



内容は、大学生への大学生活支援に関するものが多く見られた一方、認知症や引きこもり、介護殺人や障害者を包み込む社会のあり方など重要な社会問題がテーマとして取上げられていました。地域の実践として、地域レジリエンスを高めるカフェ活動やひきこもりサポーター養成研修における実習、発達障害アドバイザー研修などが行われており、その評価と課題について報告がありました。また、調査研究では、看護学生 of 精神障害者に対するステレオタイプの実習前後の変化、大学生の気質と大学生活不安・ストレスの関連、女子大学生の保健行動と心理社会的要因について調査したものなどが発表されました。介入研究では、大学生に光イメージ法を用いてストレスの軽減効果を図ったものや、大学生の就職支援としてイメージ療法を用いて介入したもの、大学生へ SAT 自己カウンセリングシートを用いた心理教育指導などいずれも効果が報告されました。また、文献からレジリエンスに影響を与える諸要因を検討したもの、新聞記事から介護殺人事件の傾向を分析し、

必要な支援を提言したものなどがありました。また、この中には大学生や大学院生の発表もあり、若手研究者の今後の発表にも期待したいところです。

午後は、市民公開シンポジウム「市民のレジリエンスを高める社会－身体のコアがあたたまる関係を築く－」が宗像学会長の司会進行で行われました。最初のシンポジスト中山玲子氏はLGBTの立場からの発表でした。先天性の視覚障害というハンデを克服するため周りに認められることを心の支えにしてきた。一方で男でもない女でもない無性というセクシャリティに居場所を見出せず苦悩する日々。そんな中で視覚障害者の聴く力を生かして「ライフコーチ」として生きがいを見出すまでの体験が語られました。「様々な困難は絶対にギフトに変えられる！」との言葉からレジリエンスを高めたからこそ言える自分への信頼と信念が伺えました。



次は、がんサバイバーの立場から松崎素子氏でした。進行がんのステージ4と診断され、崖っぷち状態。そんな時、宗像先生のがんセラピーを受け、「人から愛される」「自分を愛する」「人を愛する」3つの愛を満たすことで癌を克服することができた。飼い猫や趣味のフラダンス、職場の仲間、そして認知症の母親らと身体のコアがあたたまる関係を築き、今はがんのギフトに感謝している。自己イメージが認知や現実まで動かすことを実感できるお話でした。

荒巻りか氏は、スクールソーシャルワーカーという支援者の立場からの発表でした。地域レジリエンスを高めるためには地域を多面的に捉え、人々の多様性を受け入れることが求められる。つなぐではなく繕うという多方向に補完しあう社会作りが重要。



絶望の中にいる人に「私はここにいるよ」というメッセージを発する、そんな人を増やすことでその人の周りに人垣をつくる、そしていずれはその人が人垣になってくれる日を信じて。広い視点で地域をサポートされる実践をお聞きすることができました。

活発な質疑応答から、ストレスをなくすという発想ではなくストレスがあっても乗り越えられる、愉しめるようになること、すべての人にレジリエンスはある、レジリエンスをONにする人の存在に気づくこと、困難に向き合い問題の意味を知ったときに成長がある、

幸せになることをあきらめない、など多くのキーワードが見出されました。参加者それぞれが今、自分に必要なギフトを得られたのではないのでしょうか。

今後も市民のメンタルヘルスに貢献するべく学会の役割を皆様と共に果たしていきたいと思えます。ご協力いただいた皆様ありがとうございました。

～参加者の声～

○ 宮元 預羽（長崎短期大学）

この度、2年ぶりに参加させて頂きました。午前の第一部では、一般演題において口頭発表をさせて頂き、午後の第二部ではシンポジウムに参加させて頂きました。

午前の一般演題では、子どもからお年寄り、個人から地域と幅広い分野、様々な研究手法による研究発表がなされ、研究視点、研究手法等、私自身にとっても新たな知見を得ることができました。午後の市民公開シンポジウムにおいては、シンポジウムの冒頭に、宗像会長より“レジリエンスとは何か”を分かりやすく説明頂いた為、その後のシンポジウムも有意義に参加させて頂くことができました。中山氏、松崎氏、荒巻氏の発表を伺いながら、まさにテーマである「市民のレジリエンスを高めるには、どうしたら良いのか」を改めて考える機会が与えられました。これまで私自身の発表を終えたら、業務の都合上、すぐに帰路についておりましたが、今回は朝の受付から懇親会まで参加することができました。懇親会においては、和やかな雰囲気の中でアカデミックな話題に参加させて頂き、とても勉強になりました。会を運営して頂いた先生方に感謝申し上げます。



○ 小野 紗夏、窪田 辰政（静岡県立大学）

今回、初めて学会発表の場を経験しましたが、発表者の皆さんがそれぞれレジリエンスについて多角的視点から研究されていて、同じトピックなのにこんなにも違った、新たな知見を得られるのかと驚きました。レジリエンスは困難や逆境に耐え、立ち向かう力のことを指し、ストレス過多といわれる現代において、各個人がぜひ身につけておきたい能力

のひとつであると言えます。私は今回、レジリエンスの高さがどのような諸要因と関連しているのかを明らかにするために、文献的検討を行いました。その例として、自尊感情が高いとレジリエンスも高いことなどが挙げられます。しかしながら、他の発表者の方々のプレゼンでは、現代社会の様相とレジリエンス並びにメンタルヘルスを結びつけた新たな取り組みが行われているその実情を知ることができ、どのプレゼンもとても興味深く貴重な学びの機会となりました。

他の地域や大学などでも本学会のような学びの深い学術大会が行われたら良いだろうと感じました。



○ 寺倉 響（東京情報大学）

午前中は、会員による精神保健に関する口頭発表を多く聴講することができ幸いでした。ただ、学部3年生の私にはよく理解できなかった内容もありましたが、学会終了後に発表抄録と自分のとったメモを参考に調べ、大学の講義では学べない内容を多く学ぶことが出来たことをうれしく思います。この口頭発表で、僭越ながら私も「大学生を対象とした気



質発現と大学生活不安・ストレスの関連について」で発表させていただきました。発表時間を超えてしまい、質問をいただく事は叶いませんでしたが発表後、幾人かの方々にご感想やご指摘をいただきました。自分の勉強・技量の不足をはっきりと感じさせられるものでしたが、今後の臨床心理学研究に取り組むヒントをみつけました。最後に、学部生の身で学会発表の機会をいただいたことを深く感謝しております。会員の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

○ 武藤 収（東京メンタルヘルス株式会社）

第一部は12席の演題発表が行われ、精神障害者や認知症、ひきこもり、発達障害、介護

殺人、レジリエンス、学生(気質や不安、ストレス予防、光イメージ法、就職支援)などの演題が発表され、幅広い社会分野の実践紹介や問題提起が行われた。

第二部は「市民のレジリエンスを高める社会」をテーマにシンポジウムが行われ、シンポジストに「LGBT の立場から中山玲子先生」「がんサバイバーの立場から松崎素子先生」「スクールソーシャルワーカーの立場からいじめへの対応、荒巻りか先生」がそれぞれ登壇され貴重な体験を話して頂けた。中山先生は LGBT の痛みをポジティブ認知獲得とコーチ・カウンセラーのサポートがレジリエンスを醸成し、松崎先生はがん闘病を SAT セラピーと愛し合える仲間・母・愛猫などの存在がレジリエンスのスイッチをオンにしたエピソードを披露して頂けた。荒巻先生はスクールソーシャルワーカーとして綻んでいる状態を繕うことを意識して、さらにここにいるよと手を差しのべる人のレジリエンスの人垣をいかに創るか提起して頂けた。気質や解釈が千差万別のホモサピエンスのレジリエンスを高める社会づくりはハードルが高そうだが、まずは純粋な子どもが自殺を選択するのではなく、レジリエンスのスイッチをオンにできる社会づくりから参画したいと思えた 1 日であった。

理事の現場から—家族支援に関する研究の取組み—

○ 畠中宗一（関西福祉科学大学）

臨床と政策の統合というオリエンテーションで家族支援に関するささやかな研究を行ってきて思うことは、さまざまな政策が展開されているにもかかわらず、問題群が減少していないのはどうしてだろうかという疑問である。問題群への政策的アプローチは、問題群の環境条件を改善するのが一般的である。したがって、私の疑問は、環境条件を改善しても問題群が減少していないということになる。

これまで現代社会を、生産的・課題達成型の価値観を重視することや利便性・快適性・効率性を追求する社会として認識してきた。これらの傾向を有する社会では、葛藤を否定的なものとして評価する。吉川武彦は、規範押し込み型や欲求先取り型の育児によって、葛藤場面に弱い子どもが再生産されることを、引きこもり研究から明らかにしている。ストレスが増幅される社会にあって、葛藤と折り合う術が後退すれば、益々葛藤場面に弱い人々が拡大再生産されていく。この状況で、環境条件の改善が試みられても、葛藤と折り合う能力はさらに後退していく。したがって、環境条件の改善プラス主体の側への働きか

けが必要ではないか。主体の側への働きかけとは、関係性を生きる力を育てることである。関係性を生きるとは、他者を存在として受容し、自己の思いも伝えることができる。これが、相互性のなかで展開される現象である。この関係性を生きる力を育てることができれば、家族問題の大半は、解消していくのではないか。

このような問題意識で、今年度から文科省科学研究費・基盤研究（C）で、関係性を生きる力を育むためのプログラム開発を開始しているところである。また公益財団法人ひと・健康・未来研究財団の機関誌『ひと・健康・未来』の編集に携わり、スペシャルインタビューを担当している。さまざまな分野で活躍する人びとのメッセージに、学ぶことが多いが、それ以上に学ばなければならないことの多さに眩暈を感じるほどである。若い世代とは異なる視点から、さらなる思考の成熟を志向したい。

理事の現場から―地域包括ケアシステムの促進と人材育成―

○ 鈴木 裕子（亀田医療大学看護学部看護学科）

地域包括ケアシステムが推進されているが、一般にはあまり知られていない。住み慣れた地域で、大よそ 30 分以内に包括ケアが受けられる“まちづくり”のことである。地域包括支援センターが中学校区に 1 つ設置され、ケースワーカーや看護職がいて保健医療福祉の相談ができる。これらについて知る人が少ない中で、適切なサービスに結びつかず苦境に立たされている事例をよく耳にする。あまりに知られていない状況を何とかしたいと活動している。

対象は高齢者中心ではあるが、高齢者だけではない。例えば緩和ケアは日本ではがんについて言われることが多い。がんによる体や心の痛みへの対処法が発展しており、在宅でも定期的な往診や訪問看護・介護、訪問入浴サービスによる緩和ケアが受けられる。しかし情報や地域による差も大きい場合がある。またどうしたいのか意思を表現できない人も少なくない。専門家に相談することで適切なサービスにつながることも多い。ちなみに諸外国では他の病気へも幅広く緩和ケアが行われている。高齢者対策としては看取りへの緩和ケアも重要となってくる。

それから地域包括ケアシステムと平衡して「家庭医」の認知度も高まることを期待している。家族も含め包括的にケアすることを総合的に学んだ医師のことで、家庭医の認定制度があり最終段階では公衆衛生をさらに学ぶ。つまり地域の生命を衛る予防の力も培われ

る。私は家庭医のケア力の高さについて、在宅看護に携わり一緒に働いた経験から、20年以上前に知ることが出来た。その後、看護教育に携わる中で、再び家庭医に出会う機会に恵まれた。正確には家庭医と一緒に活動する看護師を介して再会したのだが、看護師は家庭医から強く影響を受けプライマリ（包括的）ケア看護を展開していた。学生への関わりも素晴らしく、対象の意欲を高めるプライマリケア看護師の実践に学ぶことの影響の大きさを目の当たりにした。プライマリケア看護の認知度も低く、教育体制が未開発であることは喫緊の課題と捉え、協働で開発に取り組んでいる。

会費納入のお願い

本学会の活動は、会員の皆様の会費によって支えられております。平成 29 年度の年会費は、平成 29 年 10 月 1 日から平成 30 年 9 月 30 日の期間です。今年度の年会費納入をお願いいたします。なお平成 28 年度の会費納入がまだ済まれていない方は、速やかにご納入くださいますようお願い申し上げます。会費、振込み先は以下の通りです。

会費 通常会員 5,000 円 学生会員 3,000 円

振込み先 ゆうちょ銀行 加入者名 日本精神保健社会学会 00170-6-613036

なお、前年度の未納分を併せてお振り込み頂く場合、今年度会費に未納会費を加えた金額を記入の上、通信欄に「〇〇年度分と 2 年分」とご記入下さい。その他ご不明な点がございましたら、学会事務局にお問い合わせ下さい。

機関誌「メンタルヘルスの社会学 Vol.24」の原稿募集

年報編集委員会では、会員の皆様からの原著論文を募集しております。また、総説、研究報告、実践報告、短報、研究ノート、資料等もお待ちしております。論文の書式は年報の執筆要項をご覧ください。なお、タイトル、抄録の英文についてはネイティブチェック（専門校閲）を必ず受けるようにしてください。

●原稿締切：平成 30 年 7 月 6 日（金）厳守

●送付方法および送付先

* 郵送のみの受付となります。 詳細は、投稿規定をご確認ください。

〒320-8551 栃木県宇都宮市豊郷台 1-1 帝京大学宇都宮キャンパス

滝澤武研究室内 日本精神保健社会学会事務局

日本精神保健社会学会入会のご案内

1. 主旨

今日ほど、社会諸科学がその社会的責任を果たすことを必要とされている時代はないでしょう。とりわけメンタルヘルスの問題は、慢性化する内戦や犯罪に始まり、薬物依存、弱者虐待、閉じこもり、抑うつ、仕事中毒、セックス中毒など、国も内外に山積しています。

これまで産業社会を支えてきた近代科学技術は、感情を極力排し、事柄のみに基づいて判断し、評価する秩序を作り、豊かな物の生産と消費の基盤を発展させてきました。しかし、そうした感情を排する秩序を徹底して作れば作るほど、人と人との共感する心は失われるのです。そして、「自分の持つ本当の感情は何か」を見失い、無気力に閉じこもったり、あるいは食、セックス、地位などの快感を求めることに逃避したり、弱い立場にある者を差別し、様々なかたちの暴力を加えるのです。ところが、これらの問題は、これまでの各ローカル社会における従来の秩序のあり方では、解決できなくなってきました。

そこで私達は、自分や相手の本当の感情を見だし、共感しあうメンタルヘルスを求めています。そして、それを個人にとどまらず、集団、社会に、さらには文化として表現する具体的かつ実践的な対応策を導き出すためには、精神保健社会学の理論と方法論とが必要であります。

学会長には情動認知行動療法研究所の宗像恒次氏が選出され、理事達の顔ぶれも社会学、心理学、保健学、社会福祉学、精神医学、公衆衛生学と多岐に渡っています。

様々な分野の方々が、ご入会くださるよう期待しています。

2. 指針

- ①メンタルヘルスの背景となる社会・文化的構造と変動を、社会学的な視点から研究をすすめて、世論の形成に寄与し、社会的貢献を果たす。
- ②大会やイベントにワークショップ形式を導入し、学会の運営に会員が積極的に参画する。
- ③国際的にも仲間づくりをすすめていく。
- ④建前を排し、本音で語り合える仲間や研究グループを形成する。
- ⑤社会学を専攻する学生達に、夢を与えるような仕事をする。
- ⑥大会やイベントごとに論文や本などをまとめて出版し、成果を社会に還元して行く。

3. 入会申し込み方法

送付先:〒320-8551 栃木県宇都宮市豊郷台1-1 帝京大学宇都宮キャンパス 滝澤武研究室内

日本精神保健社会学会事務局 TEL & FAX:028-627-7188、E-mail:info@jamhs.org

入会金:5,000 円

年会費:通常会員 5,000 円、学生会員 3,000 円、賛助会員一口 10,000 円（一口以上）、機関会員 20,000 円

送金先:郵便振替 00170-6-613036 加入者名 日本精神保健社会学会

※ E-mail、FAX、郵送にてお申込ください。承認後、振込み手続き等をご送付します。

日本精神保健社会学会入会申込書

フリガナ 氏 名		生年月日	西暦 年 月 日 歳 (男・女)
会員種類	通常会員・学生会員・賛助会員・機関会員 を希望する	連絡先	所属・自宅 を希望する
所属名 及び住所	〒 TEL: FAX: E-mail:		
自宅住所	〒 TEL: FAX: E-mail:		
所 属 系 (○印)	社会学・文化人類学・経済学・哲学・心理学・社会福祉学・教育学・看護学・医学・保健学・栄養学・体育学・地理学 行政学・政治学・その他()		
関心領域			

